

一般講演 31 多焦点眼内レンズ

Multifocal intraocular lens

2025年10月11日(土) 14:10-15:30
第4会場 大阪国際会議場 12F 特別会議場

座長: ピッセン宮島 弘子(東京歯大・水道橋)

土-講演 31-1

多焦点眼内レンズの術後視力不良例に関連する因子の検討:多施設研究

Visual Outcome-Related Factors after Multifocal IOL: Multicenter Study

後藤 聰¹、小島 隆司²、森 洋斎³、鳥居 秀成⁴、松島 博之⁵、永田 万由美⁵、長谷川 優実⁶、柴 琢也⁷、神谷 和孝⁸、宮田 和典³

1:大阪大、2:名古屋アイクリニック、3:宮田眼科病院、4:慶應大、5:獨協医大、6:筑波大、7:六本木柴眼科、8:昭和医大

【目的】

老視矯正(多焦点)眼内レンズ(PCIOL)を用いた白内障手術は、一部症例において術後の矯正視力が十分に得られないことがある。本研究では、術後に良好な矯正視力が得られなかつた症例を対象に多施設共同で後ろ向きに解析を行い、その要因を検討した。

【対象と方法】

2019年10月～2025年4月に4施設でPCIOLを挿入された158例267眼(男性109眼、女性158眼、平均年齢61.0±11.3歳)を対象とした。術後1か月の矯正視力が1.0未満を視力不良群、1.0以上を視力良好群とし、群間比較と多変量ロジスティック回帰分析を実施した。説明変数は年齢、眼軸長、術前角膜乱視、角膜高次収差(HOAs; 径4mm, 3-6次収差)、球面収差(径6mm)とした。HOAsと球面収差は前眼部OCT(CASIA2, TOMEY)の測定値を使用した。

【結果】

視力不良群では年齢が高く($P < .0001$)、眼軸長が短く($P = 0.0002$)、HOAsが大きかった($P = 0.0003$)。多変量解析ではHOAs($p = 0.0001$)と年齢($p = 0.011$)が視力不良と有意に関連しており、HOAsのオッズ比は14.3(95%信頼区間:7.38-22.23)、年齢のオッズ比は1.08であった。その他の因子は有意な関連を示さなかった。

【結論】

PCIOL挿入後に十分な矯正視力が得られなかつた症例では、HOAsおよび年齢が有意な関連因子であった。これらの結果は、術前の光学的特性や患者背景を考慮することが、良好な術後視機能の獲得において重要である可能性を示唆している。

【利益相反公表基準】該当有

【IC】オプトアウト

【倫理審査】承認番号取得済

【動物実験委員会】該当無

▲ TOP